

## 卓越大学院プログラム現地視察報告書(令和元年度)

卓越大学院プログラム委員会

機 関 名	東北大学	整 理 番 号	1 8 0 2
プログラム名 称	未来型医療創造卓越大学院プログラム		
プログラム責任者	山口 昌弘	プログラムコーディネーター	中山 啓子
<p>1. 進捗状況概要</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 学生の受入れ開始から半年の間、事業計画に従いカリキュラムが着実に実施されており、全体として順調に進捗している。</li> <li>・ 異分野の学生数名とファシリテーターのグループで医療等の現場に赴くバックキャスト研修、多様な背景を持つプログラム担当者による学生メンタリング等学外講師による指導や交流など、様々な学びの場が提供されており、学生からも好評である。</li> <li>・ 学生と担当教員とのコミュニケーションは良好に保たれており、学生の意見を反映できる体制を整えている。</li> <li>・ 現状では、本プログラムの在籍者は医療・生命科学分野の各研究科に大きく偏り、人文学分野の学生は在籍しているものの、経済学、情報科学の各研究科に所属する学生は参加していない。</li> <li>・ バックキャスト研修として連携先機関である地域の病院や東北メディカル・メガバンク機構（ToMMo）での研修が実施されるなど、東北大学が擁する潤沢なリソースを活用したプログラムとなっている。</li> <li>・ バックキャスト研修ではD（Data Science）・T（Technology）・S（Society）の3つのコースから各1名の学生によるチームを作っており、バックグラウンドの異なる学生間でのシナジー効果が生まれている。</li> <li>・ 企業との連携については、DTS融合セミナーにおける起業家の講義が学生に好評である。また、DTS融合セミナーは本プログラムの参加学生以外にもオープンにしているため、様々な分野の学生が参加することにより、討議を通じた分野融合の機会になることが期待される。</li> </ul> <p style="text-align: center;">【大学院教育全体の改革への取組状況】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 学位プログラム推進機構を設置し、多様な学位プログラム群による大学院改革に取り組んでいる。また、今後「東北大学高等大学院」の設置に向けた検討が進められている。東北大学の指定国立大学法人構想において、本プログラムは産学共創型の学位プログラム構築の一端を担っており、大学院全体の改革に向け、今後とも着実な取組が期待される。</li> <li>・ 研究科等関係課程への移行については、他大学に参考となるモデルを示せるように検討を進めていくことが望まれる。</li> <li>・ ファシリテーター教員に対する研修が用意されており、大学院全体への展開も含め今後の発展も期待される。</li> </ul> <p>2. 意見（改善を要する点、実施した助言等）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 学生のリクルートがプログラム担当教員の紹介に依存しているように思われる。今後は多様な学生の確保を目指し、プログラムの周知に向けた種々のチャネルを活用することが望まれる。特にホームページの充実が必要であり、広報を充実し学内外に本プログラムを周知することによって、より優秀な学生のリクルートを進めていただきたい。</li> </ul>			

- 病院での研修の関係から日本語のできない留学生の受け入れは難しいとのことだが、海外での研修や英語による質の高い授業科目の導入など優秀な留学生の獲得に向けた工夫により、本プログラムで養成する人材の国際性を効果的に涵養することも考えられる。
- 本プログラムへの学生の参加が予定されていた研究科のうち、志願者がなかった経済学、情報科学の各研究科については、バックキャスト研修等特色ある分野融合の取組を円滑に行うためにも、可及的速やかに問題点を把握、解決し、これらの研究科に所属する学生の積極的な参加を促すことが望まれる。
- 本プログラムにおいて中心となる星陵キャンパスとは別のキャンパスに通う学生について、例えば遠隔で受講することのできるテレビ会議システムを導入するなど、何らかの適切な配慮が望まれる。
- 多様な学生が学び交流することがプログラム内容の深化につながることから、社会人の受け入れを含む学生の多様化については引き続き検討することが望まれる。
- 養成する「未来型医療人材」とはどのようなものであるか、教員と学生双方が共有し、その人材像に向けて取り組むことが必要である。病院での研修やコホート研究の研修など充実したカリキュラムを提供しているが、本プログラムに参加する様々な分野の学生にそれぞれどのような効果をもたらし、どのような人材に育成するのかを更に明確化し、プログラムを着実に構築していくことが期待される。
- 企業との連携については、現時点ではセミナーでの講義など教育面での連携が中心であるが、学生のキャリアパス形成や外部資金の獲得といった観点から共同研究等研究面での連携を進めることにより、より有機的なものにするのを考えても良いと思われる。
- D・T・Sの各コースについて、各コースの内容が学生に十分周知されていないことが懸念されるため、本プログラムでこそ取り組むことのできるテーマ等に沿ったコース選択ができるような履修指導等が必要であると思われる。
- 学生は、所属する研究科での活動に加えて本プログラムのカリキュラムも履修することになるため、特に開講時間の設定や所属専攻の履修要件単位への読み替えなど、学生の所属する各専攻との間で本プログラムの意義を十分に共有するとともに、組織的な取組として、学生の負担軽減を検討し適切な配慮を行うことが必要と思われる。